想像界の生物相

マネキンとマンドラゴラ── 人形の不気味

民博 学術資源研究開発センター 山中 由里子

資料名｜マネキン
年代｜1970 年代後半
地域｜日本

日本で「マネキン」というと、ディスプレイで使われる等身大の人形のことで、みんぱくにも、衣装を着た数多くのマネキンが展示されている。右の写真は、むかしの本館展示で使われていた、通称「宇宙人」（とよんでいるのはわたしだけかもしれないが……）。特定の人種を想起させるような色や体形は人種差別にもつながるため、無機質な銀色の塗装がされ、地球儀の緯度経度を思わせる線が全身に施されている。展示リニューアルにともない現役は退いたが、今でも数体が収蔵庫の片隅にひっそりと立っている。

二〇一五年に訪れたサンクト・ペテルブルグ市の民族博物館クンストカメラには、逆に、肌の色やポーズ、表情までを精巧に再現した「生人形」タイプのマネキンが並んでいた。今にも動き出しそうだと気味悪がるわたしに研究員の人が、「夜に徘徊する奴もいるんだよ」と、とっておきの怖い話をしてくれた。展示マネキンはニュートラルでないといけないという不文律がしみ込んだわたしにはとても刺激的であった。

クンストカメラのマネキン（2015年）

◆◆◆人間植物◆◆◆

さて、マネキンがフランス語の「マヌカン」(mannequin 服を着て客に見せるモデル）から来ていることを知っている人は多いであろうが、そもそもはオランダ語（フラマン語）の「マネケン」(manneken）に由来し、man＝「人」に指小辞のkenが付いた「小さい人」という意味であった。そして近世ヨーロッパの民間信仰において「マネケン」というと、魔力をもつと信じられていたヒト型の植物、マンドラゴラ（マンドレイク）を指した。

地面から引き抜く際にそのヒト型の根が出す叫び声を聞くと人間は死んでしまう。このような描写がファンタジー映画をとおして一般にも広まっているため、マンドラゴラは空想上の植物と思われがちである。しかし、古代・中世ヨーロッパおよび中東の医学書などにおいて鎮痛・鎮静などの薬効がある実際の植物として知られてきたマンドラゴラは、今では地中海沿岸に分布するナス科マンドラゴラ属の「マンドラゴラ・オフィシナルム」と比定されている。この多年生草本植物の根はアトロピン系アルカロイドを含むため、副交感神経の抑制をもたらす抗コリン作用、幻覚誘発、催眠作用があり、摂取量によっては痙攣、錯乱、幻覚、活動亢進などの症状の末に死に至ることもある。

◆◆◆ねつ造されたマンドラゴラ◆◆◆

マンドラゴラは薬として珍重され、非常に高価であったため、ねつ造品も流通していたようである。十三世紀シリアの著述家アル＝ジャウバリーは、ペテン師どもがマンドラゴラ（アラビア語ではヤブルーフ）と称して高く売りさばいているのは、じつはシクラメンの根をヒト型に彫って、再び土に埋め、しばらくして掘り起こした擬きであることを暴露している。

このように自然を細工した「偽マンドラゴラ」は、驚くことに十九世紀末ごろまで呪術に使われていたようである。オックスフォード大学のピット・リバーズ博物館には、一八九〇年代にトルコやマケドニアで収集された「マンドレイクの根」が展示されている。

偽物であれ、なんであれ、さまざまな呪具と並ぶ干からびた「小さい人」は、十分に不気味であった。

ピット・リバーズ博物館の偽マンドレイク（オックスフォード、2018年）

※本稿は『驚異と怪異――想像界の生きものたち』に掲載されたコラムに加筆・修正したものです。